

旭医大一輪草センター（復職・子育て・介護支援センター）は、医師・看護師不足を解消し職員が働きやすい環境を整備するため、託児体制や研修制度を構築してきた。2007年の設立から今年が10年の節目。「復職支援研修」「キャリア支援」「子育て・介護支援」「病児・病後児保育」の4部門体制で仕事と家庭の両立を支援している。

山本明美皮膚科学講座教授がセンター長を務め、医師や看護師、専従職員など総勢12人体制で運営している。センター名になっているシンボルの「二輪草」は、旭川に群生す

## 仕事・家庭の両立支援

る多年草。二輪の花が「医師と看護師」「育児と介護」、5枚の花びらに「5段階の復職プログラム」というコンセプトを込めている。4部門の支援を柱に、大学と付属病院に所属する全ての医師、看護師、職員が安心して働き、社会貢献できる環境を整えてきた。

## 職場環境改善、キャリア教育も

育児中の職員を支援するため、一時的に病児を預かる取り組みをセンター開設時から実施。育児の大きな不安である子どもの病気に対応を充実させ、現在は病児・病後児を預かる保育室も設置している。また子どもや家族の急な看護・介護が必要となった場合には、バックアップナーズが代理勤務を行うなど、緊急時のさまざまなニーズに応える体制を整えている。

# 教室探訪

## 旭医大二輪草センター



大学、病院のさまざまな部署のメンバーが集まる二輪草プラン推進委員会

学ぶ機会を提供するため、10年度からワークショップやバランスの講義を必修としている。育児休暇中の職員向けに在宅学習や教材を提供する復職支援研修プログラムを提供するほか、医師向けに育児短時間勤務制度「二輪草枠医員」も実施する。全職員対象の「二輪草セミナー」は年3回程度開催。さまざまな分野の識者が講師として招かれ、職員が多様な働き方を学ぶ機会を提供している。メンタルヘルスや男性職員の育児を支持する取り組みも行い、15年からは子育てに理解ある上司や組織を表彰する「ベストサポーター賞」を制定するなど、多彩な活動を展開してきた。山本センター長は、大学と病院が一つのコミュニティとしてまとまり、ネットワークが広がることで風通しがよくなったことを強調し、「子育てや互いの働き方を考えようという土台を全員参加でつくってきた10年だった」と振り返る。こうした先進的な取り組みの成果が評価され、12年には東日本の大学病院初の「働きやすい病院評価認定」を取得。13年には「北海道男女平等参画チャレンジ支援賞」を受賞するなど、各所から注目を集めている。



二輪草センターは医師・看護師不足の解消に向けた職場環境の改善を目的に発足した。当時、社会的に要求されていたのは職員の子どもが病気になる時に預かってくれる病児・病後児保育室だった。現在ハロー下面はほぼ整備され、多様な働き方を実現する仕組み

## 山本明美センター長インタビュー

や、復職のための研修制度も整ってきた。発足から10年。働きやすい職場づくりを進めてきた成果として、育児休業取得者数の増加や、センター設立前に15・6%だった看護師の離職率が8%台へ低下したことが挙げられる。また後職別女性医師数は、2006年に0人だった講師数が16年には4人に増え、助教も11人から14人に増えた。女性医師の地位向上にセンターが果たした役割も大きい。これまででは子どものいる

## 全職員の働き方の改善へ

職員をサポートがメインだったが、今後は全職員を対象に働き方を見直し、時間外労働削減、業務効率化といった課題解決を中心にしていきたい。働き方改革についての講演にも多くの職員が参加しており、意識の高まりを感じる。ゼロからスタートし、学内から人材や経験を持ち寄り、知恵を合わせて事業をつくり上げてきた。多くの部署とのコミュニケーションを通じて、組織としての連携が強くなったことも大きな成果だと思ふ。